

---

# マッド&リビングデッド

紙原健

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マッド&リビングゲッド

### 【Nコード】

N8194L

### 【作者名】

紙原健

### 【あらすじ】

雨の日に、心を固く閉ざした少年は一人の少女に出会った。

雨の日に、死にたくても死ぬことが出来ない少女は一人の少年に出会った。

この出会いは運命とか、奇跡とかみたいにかいじゃあ暖かいものじゃない。

だからといって、涙を誘う悲しい結末を秘めているわけじゃない。ただ、単純に。そう単純に。

狂って、いるのさ。

## 序章

壁に挟まれた空は重苦しい鉛色だった。

「雨、降りそうだな」

少女は頭上に向けていた視線を元に戻すと出来るだけ音を立てないようにその場に座った。逃げ込んだ路地は飲食店と古びたアパートの隙間で、少女が座った地面以外のほとんどは腐りかけの生野菜で埋め尽くされてしまっている。

「臭い……」

まとわりつく悪臭に鼻をつまみながらも、少女はそこから立ち去ることは出来なかった。今外に出ればどうなるか、そんなことは容易に想像できたからだ。

着ていた白のワンピースには跳ねた泥の染みと、流れ出た血液が歪に絡み合つて地の色を完全に消し去っている。その色あせた裾をしつかりと握り締めて、少女は出来るだけ寒くないように体を小さくさせた。腕全体で膝を抱え込むと、長い白髪が溢れるように肩から流れる。直に地面に触れている素足は寒さで突き刺すような痛みを感じていた。

季節は木枯らしが吹き荒れる冬。

外見は十五、六である少女が薄手のワンピースで長時間外に出ていられるほど気温は優しくない。

「でも君は病気になるてならないよねえ？」

聞き覚えのある男の声に少女はびくりと体を震わせた。

「このさんむい中でも、君は絶対高熱を出したり、肺炎になったりなんかしない。他にも怪我をしてもすぐ治っちゃうよね。僕が君にぶち込んであげた鉛弾も、それが貫通して出来た銃創も、もうないんだろ？」

革靴がコンクリートを叩く。

軽く、テンポのいいその音はだんだん少女の耳へと近づいてくる。

少女のいる路地へと確実に近づいてくる。

「罪だよ。君が生きている、それ自体が罪だ。そして、この世界の生命循環において君の存在は明らかなイレギュラーだ」

カシャン、と。

少女は地面に何かが落ちた音を聞いた。いや、何かじゃなく、本当はそれが何なのか少女ははつきりと分かっていた。

それは、男が愛用している銃の空弾倉マガジンの音。

そして、続けて聞こえた機械音は取り出した弾倉を差し込んだ音。反射的に膝を抱く腕に力が入り、少女はさらに身を縮こませる。出来れば見つかってくれるなと深く深く祈りながら、奥歯をきつくかみ締める。

「僕の言ってることがわかるかなあ。いや、わかんなくてもいいや。理解なんかいらなからさ。ただ、これだけは知つていてね」  
足音が、止んだ。

「世界にとって不死の人間はただの害悪バグなんだってことをさ！」

男が路地の中に銃口を向けると少女が体を起こし、駆け出すのとはほぼ同時であった。

しかし、そのただ一つの相違点は少女が駆け出した方向が男に対して真正面、つまりは真つ向から突貫してきたことだった。

予想外の少女の行動に、男は驚きから引き金にかけた指が止まるその隙を突き、少女は軽やかに宙に飛ぶと男の顔面に右膝を叩き込んだ。膝の先から何かがつぶれる音が響く。

「私が死なないと分かっているのに何でそんな常人向けの武器を使うかなあ」

地面に降りた少女は痛みにもがく男の顔面に両手をかけると、少しでも力をこめた。すると、男の体が重力を無視したかのようにふわりと空中に浮き上がった。超人的な腕力が少女の体から湧き上がり、男をついには逆さにして、自分の頭上まで持ち上げる。

「でさ、私は何であんたから撃たれながらも逃げてたか分かる？」  
鼻血を滴らせながら、恐怖に支配された男は一心に首を左右に振った。その表情に少女はただ上目の視線を送る。冷たく、無感情な眼差しを淡々と向ける。

「そう、じゃあいいわ」

落ち着いている少女の言葉に男は解放されるのだと思ったのか、安堵のため息を漏らす。だが、それはほんの一時の猶予に過ぎなかった。

「私の前から、消えなさい」

少女は瞳をカッと見開くと、体を大きくのけぞらせた。男は突然視界がブレたことに混乱し、少女を見ようと首を持ち上げるが、すでに少女はいなかった。見えるのは高速で通り過ぎて行くコンクリートの灰色のみ。変化し続ける状況に男は周囲を確認しようと首を戻した途端、彼は激痛と共に意識を失った。

轟音を響かせてビルの壁にめり込んだ男の背中を一瞥し、少女は再び歩き出す。ぺたり、ぺたりと冷たい足音を奏でながら、少女はとある場所を目指して進んで行く。

## 序章（後書き）

初めて投稿させていただきます。

拙い文章ですが、自分なりに努力してまいりますのでよろしく願います。

アドバイス、感想などをいただけた日には私、泣いて世界を駆け回ります。

警察なんか関係なく夜の街を走ってやりますとも！

## 第一話 シャッターボーイ

その日は雨だった。

スーパーで買った安物のビニール傘が水滴を跳ね返す音を聞きながら、さいかまさひと雑賀正仁は自宅の前で立っていた。今は亡き両親の残してくれた財産の一つであるその家は大きくてもなく、中流家庭を代表しているようなごくごく普通の二階建てだ。

正仁は家に入れないわけではない。

入りたいのだが、目の前で発生している事象にどのように対処してよいのか分からず、立ちすくんでいるのだ。

「どうすりゃいいんだよ……これ」

右手に持つ夕飯用の食材は傘と共に買ったものだ。その重みが腕の骨を軋ませ、いい加減おろしてくれよ、と正仁にささやく。だからといって正仁は決意の一步を踏み出すわけでもなく、玄関前にいるそれを見下ろすことに留まっている。

「なんでウチの前に女がいるんだよ……」

そこにいたのは一人の少女だった。

玄関のドアに背を預けるその少女は、絹糸かと見まがうほどにつややかな白髪を肩にかけて睡眠に身を堕としている。身に着けている服はやけに薄汚れており、汚れの大半を占める赤黒い染みに正仁は思わずギョツとした。

「怪我、してんのか……」

正仁は咄嗟に少女の体を抱きかかえようと手を伸ばす。だが、その手は少女の服に触れる直前で停止した。頭の中のもう一人の自分が伸ばそうとする正仁の手を制止させる。

『変なことに巻き込まれんのはもうゴメンだろ?』

「そうだけだよ……。寒いだろうし、ちょっとくらい助けてあげ

てもいいんじゃない？」

『甘いな。こんなんウチにあげてどうすんだよ？ 穀潰しにしかなんねえぞ？ それと、ちょっとどれくらいの期間置いとくつもりだ？ 一時間か？ それとも一週間か？ この子が目を覚ますまでなんて馬鹿な解答はクーリングオフだからな』

つくづく自分は甘い人間なんだと思う。

そうばやきながら、正仁は過去に自分の甘さが招いた不幸の数々を走馬灯のように脳内で駆け巡らせる。貸したら九割の確率で返ってこない小銭。電車の中で何もしていないにも関わらず痴漢だと指を突きつけてくる女子高生。そして、両親の死。

『だろ？ だから止めと……な、お前何して！？』

「見捨てんのはやっぱり気分が悪いんだよ」

正仁は怒り狂うもう一人の自分を闇へと押しやり、少女の体を抱きかかえる。スーパーの袋の中に白い髪が流れ込んで行くのが食材の品質的にいかななものか、と少しだけ不安だったがそれも忘れることにした。

改めて見る少女の顔は幼さを残した中に、大人の持つ気品のようなもの秘めていた。年齢的には外見を総合的に見て自分と同じく十五、六であると正仁は判断した。

正仁は少女を抱えたままドアをどうにか開けると、靴を適当に脱いで居間へと向かう。家に唯一存在するソファーに少女を丁寧に寝かせ、筆筒から取り出したバスタオルをかけてやると、そのまま台所へと直行し牛乳を火にかけた。

「何してんだ……俺は……」

少し温かみを増して行く乳白色をぼうつと眺めながら、正仁はぼつりとこぼした。

こんな女を助けたところでメリットなんかまるでない。あるのは無意味なりスクと虚しく満たされる自己満足だけだ。そんなことは正仁も十分理解していた。それでも、そうだとしても、彼は少女を助けることを選択した。説明できるほど明確な理由があるわけでは



ない。本能的に、正仁は感じ取ったのだ。

この少女は、助けなければならないと。

牛乳から湯気が立ち始めたころ、ピンポン、と正仁の耳にインターフォンの軽快な電子音が届いた。

「こんな雨の日に客？」

いぶかし訝しく思いながらも正仁は玄関へと駆ける。

「どちらさまですかと……」

ノブを引いた先にいたのは鼻に大き目の絆創膏を貼り付けた青年だった。見るからに痛々しい姿に正仁は少し体を後退させるが、そんな彼に構うことなく青年は軽い調子で語りかける。

「どうもどうも！ 初めまして雑賀正仁くん！ 私わたくしクロノス製

薬の桐山と申しますう」

「はあ、桐山さん……ですか」

「はいはいはい！ 桐山でございますう！」

仰々しく礼をする桐山。彼の姿は至って普通の営業者のようであった。特に高そうでもないスーツに革靴を身につけ、顔には営業スマイルを貼り付ける。だが、その全てを絆創膏が木っ端微塵に打ち砕いているのが少々残念でもある。

「で、その桐山さんがウチに何のようで？」

「あゝあのですねえ、ぶっちゃけあなたには用はないんですよ。

ええ、そうなんですそうなんです。私が用があるのはあなたが拾った物なんですよ」

「拾った物？」

正仁はしばしの間思索する。自分は何が拾ったろうか、そう考えてまず先に浮かび上がったのは玄関でついさっき見つけた少女だった。しかしそれはさすがにないだろう、と可能性を打ち消した正仁はとりあえず、知らぬ存ぜずで通すことに決めた。

「残念ながら何も拾ってはいないんですが……」

「またまたまたあ！ しらばつくれちゃって。本当は何が拾ってるんでしょ？ ねえねえ、どうなんですか？ 雑賀さん」

「知らないものは知らないんで。すいませんね」

「……そうですかあ。それは残念ですねえ」

桐山は悲しそうな表情をわざとらしく作り上げるとスーツの胸元に手を差し込んだ。

「いやいやいや、本当に残念ですよ。私がちゃあんと調べた上で、間違いなくこの家にいると知っていると分かった上であいう質問をしたというのに。それにも関わらず、あなたは愚かな嘘を貫くんですねえ」

「何を言って……………ん？」

スーツから抜き出された腕、その手に握られているのは黒色をした明らかな凶器。

「私も出来ればこいつの引き金を引きたくないんですよえ。言ってる意味分かります？」

桐山の手のひらで弄ばれるオートマ式の銃。それが何なのか分からない正仁ではない。だが、彼は考え自分自身に問いかける。

何だ？ この状況は。

背筋を支配する寒気はじわりじわりと全身を喰らっていく。本能が危険のサイレンを鳴らしつつける。

「まあ、あれです。私としては事をこれ以上荒立てたくないわけですよ。つまりは、これが最後通告なわけですねえ」

桐山の唇が切り裂かれ、鋭い犬歯が正仁の黒瞳こくどうを射抜く。狩人が獲物を見定めた、殺すということを決意した目だ。

「もう一度、わかりやすく聞きますよ？ あなたが助けた白髪の少女をこちらに引き渡してください」

「く……………！」

「ほおらあ。その反応はやっぱりここにいるんじゃないですかあ」  
けひやひや、といたずらっぽく笑う桐山。しかし、その目は変わることなく冷酷な光をたたえている。

正仁は脳裏にソファで眠り続けているであろう少女を気にか

ながら、どうにかこの危機を打開出来はしないかと模索したが現実では到底不可能としか思えない策しか浮かんでこなかった。

「さあて。そろそろいいですかあ？ 私は彼女を連れて帰らないといけないんですよ。だからさっさとそこをどけばべぶごっ！！」

絶対に成功しないであろう策。だが、奇襲ならばゼロの確率も二くらい上がるはずだ。

それが、正仁が余裕の表情を見せる桐山の顔面に拳を撃ち込んだ唯一の根拠。

桐山は突然の拳打を見事に喰らい、鼻血を吹き出してコンクリートに転がった。

「な、何をするんですか！ 銃を持っている相手に殴りかかるなんて……………死にたいんですか！」

「さあ、なんで俺はこんな馬鹿をしたんだろうな」

何故俺は見知らぬ少女を助けようと命を張っているんだ？

何故俺は見知らぬ少女を守り抜こうと拳を振るつたんだ？

このどうしようもなく、理解できない感情は一体何なんだ？

考えたこともない疑問がフラッシュバックのように次々と沸いてきては、すぐに移り変わっていく。

「まあ、いいでしょう。どうせやるつもりだったことが前倒しになっただけです」

ボタリボタリ、と絆創膏の隙間から溢れる赤い液体を拭き取りながら桐山は立ち上がった。雨に濡れる家の前の道路で、スーツを水滴に曝しつづける彼は殺意の吐き口を真つすぐ、正仁に突き付ける。

「これはこれは、予想外でしたね……………」

轟音。

内耳が弾け飛びそうになる程の音波が正仁の頬を駆け抜けた。

撃ちやがった。

穿たれた扉を背景に、正仁の脳内でサイレンがけたたましく鳴り響いていた。

「モデルガンとも思いましたかあ？ この銃が」

流れる冷や汗がさらなる爆音で吹き飛んだ。

「あなたは、何か誤解していますから一応お教えいたしましょうねえ。私は目的を達する為ならばいかなる障害をも排除せよ、という命令を受けているんですね。つまりは、あの少女を返してもらう為に死体が一体転がろうが構わないですよ」

二発目は正仁の右膝を掠めた。周囲を立ち込める硝煙の臭いが鼻に染み込んで行く。

もう奇襲は出来ない。歯軋りするたびに心のどこかが恐怖に波立った。

「あの子は……何だ……」

「あなたが知る必要はありませんよ。ま、しいて言うならば遺産ですかね」

「遺産……？」

ゴリ、と熱い銃口が正仁の額に突き付けられる。桐山の口角がゆっくり引き裂かれ、蛇のような舌がちろりと口元を這った。

「ええ、あなたの祖父、雑賀誠二郎の遺産ですよ」

「祖父ちゃんの……遺産？」

雑賀誠二郎。かの人物は世間一般でどう呼ばれているか、正仁はよく知っていた。

マッドサイエンティスト。

その超人的な頭脳で医学の道を究めた誠二郎は科学の道へと足を踏み入れた。人を生かす道を新たな視点から探したいと、そのような理由で、彼は全知全能である神を冒瀆するある物を作り上げた。<sup>ダミーセル</sup>不死細胞と呼ばれるそれは人体に組み込むことで遺伝子情報に強制的に介入、人が元々持っている細胞の構成成分を再構築し、新しい細胞を生み出した。その細胞の特徴は、破壊されないこと。どれだけ切り刻まれようと、銃弾を撃ち込まれようと、その細胞は瞬時に修復する。まさに、身代わり（<sup>セル</sup>ダミー）の生命だった。

しかし、その発明品が実用化されることはなかった。

「そりゃあ、そうですね。不死細胞なんてとんでもない異物を体に入れられて人体が持つはずがないんですから」

初の人体実験で生み出したもの、それは細胞の侵入に耐え切れず崩壊して行く死刑囚の肉体だった。

超次元の産物が地を這う者に納まるはずがない。重なる失敗の責を問われた誠二郎はある日、忽然と姿を消したのだった。

「だけどですねえ、雑賀誠二郎が消えたことで新しい計画が発足したんですよねえ。その名も……」

「新自律型人型兵器製造計画うつつうつう!!」

ふざけた風でけらけら笑い、桐山は今一度正仁へ視線を送る。その瞳は、今度こそ冷酷に命を奪い取ることを覚悟した狩人のそれだった。

「と、まあ簡単に言えば死なない兵士を作るなんていう馬鹿げた計画なんです。そろそろお話ししてる時間もないわけなんです。え。というわけで、さようならあ」

あつという間だった。

正仁が救いを乞う暇もなく、逃げる余裕もなく、反撃に移る隙も与えられず、桐山は銃の引き金を何らためらうこともせず引いたのだった。

そして、正仁の耳に金属音が、鳴り響いた。

## リビングデッド・ガール

弾丸は正仁に当たるとはなかった。

桐山が引き金に指をかけた瞬間、彼のすぐ脇から何かが閃光のごとく飛び出し、桐山を鈍器で殴り飛ばしたのだ。向かいの家の壁に叩きつけられる桐山をよそに、正仁の神経は目の前のそれに一心に注がれる。鼻をかすめる牛乳の匂い、濁った白地のワンピース、手に握り締めるは正仁が火にかけていた鍋。そして、絹のように艶やかな白髪をなびかせた少女が正仁を守るかのように、立っていた。

「お怪我は？」

少し緊張したように震えた声。それに正仁は戸惑いながらも答える。

「あ……………ない、けど」

「そうですか……………よかった」

その言葉は本心からの安堵だったようで少女は正仁にちらりとわずかな視線を送り、微笑んだ。

「君は……………！」

何者なのか。そう少女に声をかけようとした正仁の視界にある光景が移りこんだ。見開かれる眼。その信じがたい情報は稲妻のごとく脳を駆け抜け、口から飛び出した。

「何で、何で君は立っているんだ？」

桐山の銃から飛び出した弾丸は正仁には当たらなかった。しかしながら、その鉛の塊は寸分違うことなく銃口から発射され、空間を突き進んだ。

少女の左胸を目掛けて。

胸元から噴出す鮮血は少女のワンピースをおぞましいほどの紅に染め上げる。

「痛いです……………ねえ」

桐山は口元から一筋の血を流しているが、相変わらずにへらにへらと笑いながら銃口を突きつける。

「なあんで今来るかなあ、母なる肉体マザービースちゃあん」

「その名で呼ぶな。下衆が」

「ふうん、反抗的だねえ。じゃあ、こう呼ぶことにしよう。死んでも死んでも死に切れないクソゾンビちゃん!!」

発砲音が響き渡り少女の肉体がさらに穿たれた。しかし、少女は依然として正仁の前から退こうとはしない。表情も変えず、苦しみの声も上げず、正仁を守り続ける。

「この人は、絶対に殺させない」

「え？」

少女は振り向いた。はつきりと、今度こそ確かに正仁の顔を正面から捉えた。

「この人には、役目があるのだから」

わけが分からない。この女は何が言いたいのだ。

正仁は声に上げようと口を開いたがその黒い瞳が捕らえたのは真っ赤に染め上げられた上半身だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8194/>

---

マッド&リビングデッド

2010年10月17日04時11分発行